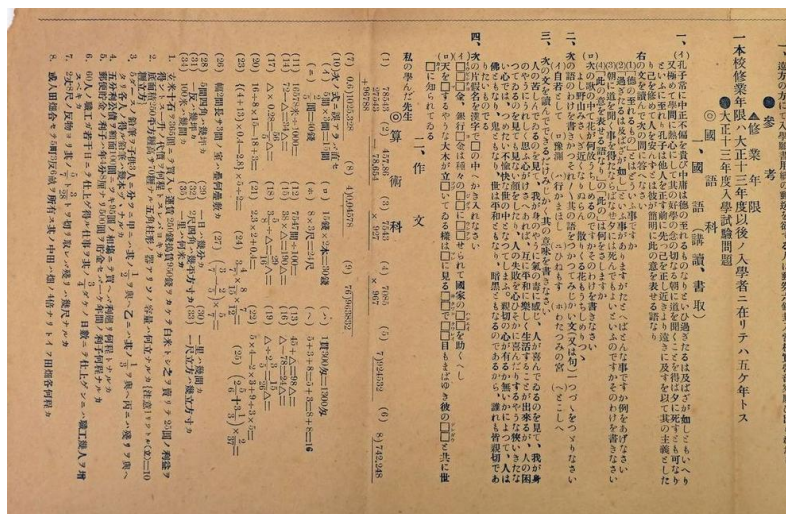


五、学校生活 その2 座談会「学苑懐古」---第一県女新聞第3号（昭和23年12月発行）より

築瀬 「規律風紀もやかましかったが学力体力でも日本一を称していた。採点はきびしかったが優秀なものは92、3点をとった。85点以上はなかなか取れなかった。生徒もよく勉強した。一級45名で4、5名も落第したことがある。セーラー服になったのは大正10年頃です。学用品も近所に店がなくて不自由でした。生徒が自発的に購買部を作って上級生が係をやった。」

アーカイブズ委員会所蔵資料の「大正14年度広島県立高等女学校入学志願者心得」に、前年度の入学試験問題（国語、作文、算術）が載せられています。受験希望者が増えている頃です。



「大正13年度入学試験問題」

出典：「大正14年度広島県立高等女学校入学志願者心得」2011-002-有朋23期

次に、明治43年(1910年)頃の県女3年生の試験問題があります。現在の中学3年生です。

国語

1.次の文の解釈を記せ。

- (イ) 見ぬ世の人の善きものかはと思はるるなり。
- (ロ) さるは国の費を厭はせ給ふあまりに万ことそがせ給へるなるべし。

数学

- 1.平行四辺形の同底、同高の矩形の面積が等しいことを証明せよ。
- 3.  $A \cdot B \cdot C$  の三角形において一辺の平行なるを  $E \cdot F$  としたとき  $AB : BE = AC : AF$  なることを証明せよ。

歴史

- 1.リシュリーの政治を記せ。
- 2.ナントの勅令廃止及びその目的如何。

物理

- 1.雷は如何にして起こるものなるか。
- 4.羅針盤・レンズの応用。

出典：『皆実有朋百周年記念誌』

当時の試験はこのような問題だったのですね。

**久留島** 「何しろ電車が開通したのが大正2年、あの頃は西堂橋や鷹野橋がまだありました。己斐まで30銭で行けました。学校の近所も淋しいものでした。」

大正元年（1912年）11月23日、西塔川（運河）を埋めて出来た道路に紙屋町－御幸橋間、広島城の外堀を埋めて出来た道路に、広島駅－相生橋間と八丁堀－白島間の電車が開通、少し遅れて12月8日相生橋－己斐間も開通しました。

出典：『広島電鉄開業100年・創立70周年史』広島電鉄、（平成24年）



「広島市街新地図」明治39年、瀬尾増蔵作成  
広島県立文書館所蔵、長船友則氏収集資料、資料番号（200407 831）の一部

**築瀬** 「成績会議が長くかかった。及第の問題はやかましかった。女の先生は大抵学校にとまりこんだ。自学自習によって学力をつけた。斎藤校長は優秀な教員をよく集めた。入学考査も5人に1人の割で、天下の秀才を集めた。人物・学力・家柄と条件がやかましかった。岡山・山口等の遠方からも来ていて寄宿舎に5、60人入っていた。名望家の子女が集った。」

女子を遠くの高等女学校に通わせられたのは、女子の教育に進歩的な考えを持ち、経済的に余裕がある家庭だったということですね。寄宿舎は正門を入った左奥にありました。千田町に新しく寄宿舎が完成したのは大正12年（1923年）です。大正9年に洋服の制服が決まるまで、式日には生徒も紋付袴の正装でした。下の左の写真がそうです。昭和10年（1935年）頃の寮生の写真には、毎日お弁当を作ってくれた寮母さんと、大八車で運んでくれたおじさんと犬のジョーンが一緒。何の記念写真なのか和やかです。



6期寄宿舎生卒業（明治44年）

出典：2010-009-有朋6期



千田町の寮で（昭和10年頃）

出典：『皆実有朋九十年史』

**久留島** 「家事専攻科が出来たのが大正12年でした。専攻科は7回まで出て、昭和3年女専が出来て廃止になった。」

大正後期になると広島県内でも高等女学校進学希望者が増え、上級学校への進学希望者も増えてきます。大正9年（1920年）県女に修業年限3年の家事補習専攻科を設置、大正12年には専門教育的な科目を加えて専攻科と改称しました。斎藤校長は女子高等教育推進の中心的人物で、文部省、次いで広島県と粘り強く交渉し、専攻科は昭和3年（1928年）に広島女子専門学校に昇格しました。しかし広島県の財政は苦しく、昭和10年に新校地宇品に移転するまで、県女の校舎に仮住まいが続きます。広島女子専門学校は戦後、広島女子短大、広島女子大学、県立広島大学へとつながっていきます。

下の写真は昭和初期の登校風景です。向かって左側の門柱に「広島女子専門学校」と大きく記された門標が見えます。向かって右側の門柱に小さく見えるのが「広島県立広島高等女学校」の門標です。当時は先生や上級生には必ず立ち止まって礼をし、先を譲りました。



昭和初期の登校風景

出典：2010-009-皆実有朋会

**制服**については、大正9年（1920年）に校章・制服が決まったところまでは（学校生活 その1）で触れていますので、その後を続けます。

大正末期、ボックス型はそのままですが襟の形が変わります。帽子が特徴でした。



大正末期の制服



ふだんは白の襟カバー

出典：『皆実有朋九十年史』



夏服

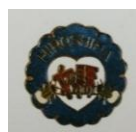
昭和2年（1927年）現在のセーラー服に近い形になり、ベルトのバックルではなく、制服の胸に校章をつけるようになりました。上着の丈は現在のセーラー服より長めで、襟と袖口の線は“白”ではなく“銀ねず色”と当時の方は書いています。



昭和2年頃の制服



夏の制服



校章

出典：『皆実有朋九十年史』

やがて物資不足で制服の布が手に入りにくくなり、昭和8年（1933年）広島県下で制服をセーラー服に統一しました。県女の場合は上着丈が短く、襟が小さくなるなど微妙に従来の制服と異なっています。この頃の髪型は、1年生入学時はおかっぱ、2年生で前髪をあげ、3年生で長くなった髪を横で二つに結ぶ、上級生になると後ろで一つに結ぶなど、髪型も大体決まっていました。



県下で統一されたセーラー服



夏の制服

出典：2019-002-有朋36期

2枚のクラス写真。左の写真は昭和17年(1942年)3月撮影なので、入学は1年前。制服はそろい、仲の良い笑い声が聞こえそうな写真。右の写真は物資不足の影響なのか、制服はまちまちです。





昭和 17 年 3 月撮影



昭和 17 年 4 月撮影の入学記念写真

出典：『皆実有朋九十年史』

昭和 18 年頃になると、次の写真のように安全面などからネクタイをしなくなり、セーラー服を知人から譲り受けられない場合は、ヘチマ襟の国防服を作るようになりました。次第にスカートはモンペに変わっていきます。



出典：『皆実有朋九十年史』

女学校の制服も時代の変化と無縁ではありませんでした。

\*\*\* 出典 \*\*\*

記述内容は広島県立広島皆実高等学校発行の『皆実有朋八十周年記念誌』（昭和 57 年）、『皆実有朋九十年史』（1991 年）、『皆実有朋百周年記念誌』（平成 13 年）を参考にした。

#### 【資料の記載について】

「2011－002－有朋 23 期」：2011 年度 2 番目に登録した、有朋 23 期生に関する、卒業生ご自身あるいはご遺族により寄贈されたアーカイブズ資料。

「2010－009－皆実有朋会」：アーカイブズ委員会発足の平成 23 年（2011 年）以前に皆実有朋会に寄贈されていた資料を 2010 年度登録資料とした。その 9 番目に登録した、寄贈者が不明のアーカイブズ資料。